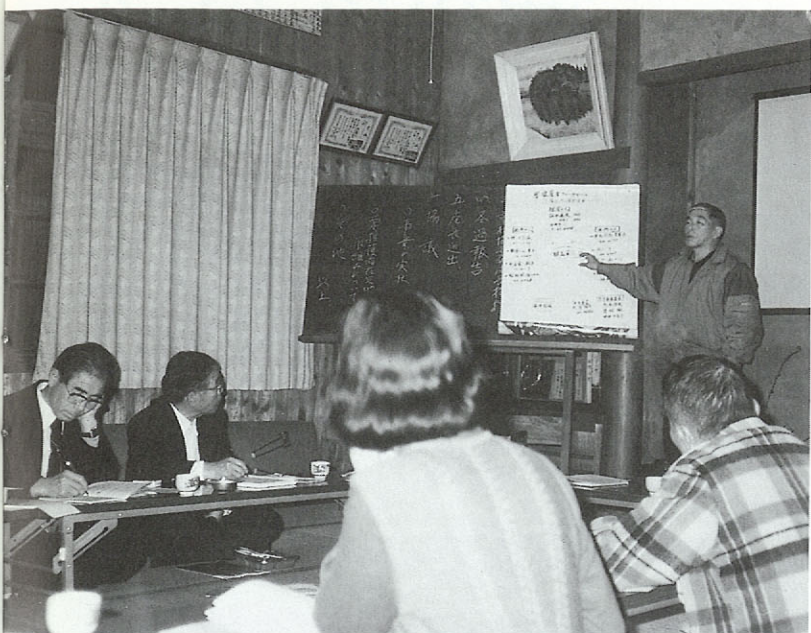


# 福祉をもっと身近なものに——地域福祉

## 人吉市

### フローチャートの作成と実践



フローチャート作成のシーン

人吉市の進めているフローチャートは、いわば援護を必要としている人のカルテである。フローチャートを見れば、対象者の名前、その対象者がどんな助けを必要としているのか、今どんなサービスを受けているのか、ボランティアやキーパーソン（ボランティアの連絡調整をするリーダー）のほか、対象者を取りまく人々がどのように結びついているのかが一目でわかる。

昭和六〇年、熊本市とともに「福祉ボランティアのまちづくり事業」(ボランティア事業)の指定を受けた人吉市では、「友愛訪問活動」を行った。一人暮らしのお年寄りに近所の人が最低一日一回は声をかける。大きな成果は、市民のボランティアに対する意識づけができたことだった。しかし一人一人の

対象者の必要とする助け(ニーズ)はそれぞれ違う。買物、食事、健康管理、話し相手…。これらのニーズを的確に把握して、実のあるサービスに結びつけることはできないか。そのためには福祉関係者、保健・医療機関、家族、近所の人々を線でつなぎ、図式化し、それぞれが活用できるようにものにする必要がある。

人吉市には活動の中心となる七つの

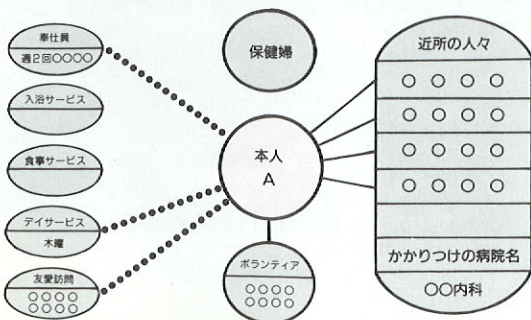
校区社会福祉協議会(校区社協)があり、それぞれの地域の実状に応じた取り組みが行われている。地区推進委員会、さらに町内や隣保班単位で会合を持ち、誰がどんな援護を必要としているのか、ニーズに対して何ができるのか、対象者一人一人について徹底的に検討し、フローチャートにまとめ上げていく。作成したフローチャートの実践にあたっては、社協(家庭奉仕

#### フローチャート

対象者名	性別	生年月日	住所	でんわ
A	女	M.O.O.O	人吉市〇〇町〇	〇〇町〇〇 △△△△△△

#### 対象者ニーズ

1	冬期石油ストーブの給油	4	書類の処理代筆
2	家具の整頓	5	車での輸送
3	話し相手	6	
町内会長名	民生委員名	キーパーソン	家族名
〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
△△-△△△△	#	△△-△△△△	〇〇〇〇



員、行政、保健所、保健センター(保健婦)などが「在宅福祉サービス連絡会議」を組織して、お互いの交流を深め、協力、連携に努めている。「もっと若い人にどんどん参加してもらいたいし、場所によってまだ認識の差がある。時間をかけて息の長い活動にしなければならぬ。今はその土台づくりです。」(東区社会福祉協議会 会長 原口三角さん)

## 飽田町

### 老人パワーを子供達に



飽田町ふれあい事業 郷土料理づくり

昨年十二月に飽田町社会福祉協議会から「飽田ん民話」という冊子が発行された。飽田地方の民話をこの地方の方言で綴ったもので、町内に限らず県内各地から大きな反響があり、話題となった。町社協ではこの冊子を町内の全世帯に配布するとともに、お年寄りから子供達にこの地方に古くから語り継がれてきた民話を話してもらう講演会を開いている。

熊本市のベッドタウン化が進む飽田町。人の入れ替わりも多く、住民同士の人間関係が希薄になると同時に、核家族の増加にもない、いわゆるかきつ子が多くなってきている。

「老人のパワーを子供達に」、お年寄り子供達とのふれあいを通して、町全体の人々の交流、地域福祉の意識を高めていこうというのが町社協のねらいだ。町社協主催で民話の講演会のほか、健康ウォーク、竹馬乗り大会、郷

土料理教室など、お年寄り子供達の交流事業が毎月計画的に実行されている。

また、町内十五の地区ではその地区の事情に応じ、伝承遊びや友愛訪問など独自の活動が行われている。砂原地区の「ほほえみ会」は、田植え、稲刈り、もちつきまで年間を通じて実施し、保護者や地域の住民を取り込んだ活動に発展している。

普段接する機会の少ないお年寄り子供達あううちに、子供達の意識も変わってくる。お年寄りを尊敬する気持ちが生まれ、あいさつ等の習慣や人への思いやりなど、子供達のみせる行動も変わってきた。また、町に新しく転入してきた人からは、これらの活動に参加していくことでその地域の生活に溶け込みやすくなったとの声もきかれるという。

「お年寄りに接し、理解し合うことで福祉というものの考え方が自然に身についてくるものだと思います。最終的には、一人暮らしのお年寄りのケアなども、行政に頼らず地域ぐるみでやっていたいようにしたい。」(飽田町社会福祉協議会 福祉活動専門員 池上清隆さん)

砂原ほほえみ会 田植え→もちつきまで

